

高校同級生のL君の父は中国広州出身で、中国料理店を経営していた。ぼくらはL君の父が経営する料理店で、いろいろと珍しい料理をご馳走して貰った。L君の父は温厚にして篤実な人で、「お金は人を差別しない」と話した。人間は人間を差別したが、お金はすべての人に平等だ、というのがだ。

その話は、生身の中国包丁のように直截で、ざっくりと胸に残った。お金の本質をつく大人にはじめて会った。L君は直観力が強い秀才で、卒業アルバム扉の金釘流の文字で「お金で解決できないことはない」と書いてよこした。この言葉にもズキリとした。冗談で書いたとも思えるが、冗談めかした本気だと感じた。L君はお金の話が好きで、それは父親の影響だろう。

L君は名門大学の経済学部に入學し、学生時代から株をやっていた。株で儲けた金で、ぼくらに酒をおごってくれた。それはありがたかったけれど、L君が講釈する「お金がすべて」という話には、いささか鼻じろんだ。なんとなく会わなくなり、L君は大手銀行に就職してニューヨーク支店へ行った、という話を風のたよりに聞いた。

L君の名前を新聞や雑誌で目にするよう



絵・江口修平

お金は人間を差別しない

嵐山光三郎

になったのは一五年前だった。銀行をやめたL君は自前のIT会社を起業して、時代の寵児になった。時代のさきを読む経営書がベストセラーになり、高級自動車に乗って出勤する姿がテレビに映った。成金といえば成金だが、三〇〇名の精鋭社員を擁する会社だからまだまだ発展するだろう。

ぼくはL君とはまったく別の世界へ足を踏みいれ、芭蕉を追い、ここ二年間の仕事は、鉄道廃線跡を歩く旅であった。栄えたものはいつか亡びる運命にあり、廃線となった軌道の荒野を流浪する日々だ。お金とは縁がない。高校生のころから漂流願望があった、その延長で空漠の地平へ歩いていく。

L君が経営者として成功したのは、なるべくしてなったのである。お金を儲ける行為に執心した結果、お金持ちになった。

せんだってL君から電話があり、銀座の寿司屋で四五年ぶりに会った。このときもL君がおごってくれたから、終生、おごらねばなしである。ぼくが新刊の『新廃線紀行』（光文社）を渡すと、L君も刊行されたばかりの本をくれた。扉のページには、なつかしい金釘流の文字で、「金があっても偉くない」とサインしてあった。

あらしやま・こうざぶろう●1942年、静岡県生まれ。作家。平凡社「太陽」編集長を経て独立、執筆活動に専念する。1988年『素人庖丁記』により講談社エッセイ賞受賞。2000年『芭蕉の誘惑』によりJTB紀行文学大賞。2006年『悪党芭蕉』により泉鏡花文学賞、2007年読売文学賞をダブル受賞。他に『旅するノラ猫』『下り坂 繁盛記』『新廃線紀行』（近著）など著書多数。

